氏名	佐々木 美歌
ヨミガナ	ササキ　ハルカ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第334号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　アメリカ歌曲のディクション分析 ―「近現代アメリカ芸術歌曲」「アメリカ民謡」「英語詩による日本歌曲」を題材として―
	〈演奏〉　Samuel Barber：Despite and Still（Op.41）よりA Last Song(13”00）他
論文等審査委員	
（主査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　永井　和子
（副査）	東京藝術大学　准教授　（音楽研究科）　侘美　真理
（副査）	東京藝術大学　准教授　（音楽研究科）　櫻田　亮
（副査）	作曲家　服部　公一

（論文内容の要旨）

本研究は、日本におけるアメリカ芸術歌曲の発展において重要なディクションを中心に、日本人歌手にとって不得手となりうるアメリカ英語の発音に着目したものである。研究に際して、３つの分類を挙げた。「近現代アメリカ芸術歌曲」ではSamuel Barberの歌曲集《それでもなおDespite and Still》(Op.41) を、「アメリカ民謡」ではAaron Coplandの歌曲集《古いアメリカの歌I, II　Old American Songs I, II》を、そして「英語詩による日本歌曲」では服部公一氏の歌曲集《小倉百人一首より》を題材として取り上げた。

序章では、本論文でアメリカ芸術歌曲を研究するに至った理由や、取り上げる題材の概要と本論文における必要性、そして現代アメリカ英語の歌唱におけるディクションについて述べている。

第１章では、「近現代アメリカ芸術歌曲」のディクションについて考察した。アメリカ芸術歌曲に欠かせない作曲家であるSamuel Barberの生涯とともに、詩のバリエーションが非常に豊かである晩年の歌曲集《それでもなおDespite and Still》(Op.41) の中から、‘A Last Song’と‘My Lizard’を取り上げている。ディクションだけでなく、詩の韻律を踏まえた音楽的側面の考察も加え、より深く広い視点から「近現代アメリカ芸術歌曲」について考察している。「近現代アメリカ芸術歌曲」にとって、Samuel Barberがいかに重要な作曲家であったか、また、Samuel Barberにとって《それでもなおDespite and Still》(Op.41) がその生涯の最期をいかに体現しているかを理解し、《それでもなおDespite and Still》(Op.41) を研究することで、アメリカ芸術歌曲の他の作曲家の曲にあたる際の礎となると考える。

第２章では、「アメリカ民謡」のディクションについて論じている。ディクション研究には欠かせないその国の文化や作曲家の背景を交えながら「アメリカ的な音楽とは何か」を考え、Aaron Coplandの歌曲集《古いアメリカの歌I, II　Old American Songs I, II》の中から、特に‘Simple Gifts’と‘The Little Horses’を中心に取り上げた。Aaron Coplandはアメリカ人作曲家の中でもかなり長く生きた作曲家であり、アメリカ合衆国内でも重要な地位にいた音楽家であるため、他の著名なアメリカ人作曲家たちの作品に触れる機会も非常に多かったはずである。また、20世紀のアメリカ人作曲家たちの礎となった作曲家でもある。そして、《古いアメリカの歌I, II　Old American Songs I, II》は、アメリカ人にとって耳慣れた様々な民謡が、Coplandらしい作風となって、長い間世界中で親しまれてきた歌曲集である。更に、《古いアメリカの歌I, II　Old American Songs I, II》の詩には、特徴的な単語や音の響きが多い。以上のことから、ディクションに留まらず韻律の側面からも深く考察している。

また、３つ目の分類である「英語詩による日本歌曲」については、筆者自身が日本人であるということを踏まえ考察している。アメリカ英語と日本的音楽の融合から生まれた「英語詩による日本歌曲」を考察することで、アメリカ英語を母国語としている歌手とはまた違う視点から、アメリカ英語をより深く研究

することが可能であると考えたからである。第３章では、アメリカ英語に精通しているであろう服部公一氏の《小倉百人一首より》を研究材料として取り上げた。本多平八郎の英訳した小倉百人一首に、前衛的な曲がつけられたこの歌曲集は、英語という日本人にとって斬新な響きを伴ってるにも関わらず、日本人である聴衆や歌手に、日本的な情緒を感じさせる名曲である。また、秀作であるにも関わらず、まだあまり日本では演奏されていない。《小倉百人一首より》を世に広めるためにも、本論文では《小倉百人一首より》を研究材料に選定した。

本論文は、日本人がアメリカ芸術歌曲を歌唱する際、ネイティブである聴衆にいかに自然に伝わるかを念頭に置き、歌唱の際のディクションの可能性を示唆したものである。歌い手としての目線から考察していること、またディクションについては、歌い手それぞれの環境により、大きく捉え方が異なることもあるという点について、留意しておきたい。

（総合審査結果の要旨）

＜論文＞

本研究はアメリカ歌曲のディクション分析を綿密に試みた大変意欲的な論文である。

研究に際し、３つの分類を挙げ各章毎に考察を進めている。まず序章で本研究に至った理由や取り上げる題材の概要が述べられるが、研究の意図や志す研究姿勢が明解である。

第１章「近現代アメリカ歌曲」サミュエル・バーバーの《それでもなお 作品41》、第２章「アメリカ民謡」アーロン・コープランドの《古いアメリカの歌I, II》、第３章「英語詩（英訳）による日本歌曲」服部公一の《小倉百人一首より》とし、各歌曲集から数曲を選曲して綿密なディクション分析と詩の分析をした上で特に日本人歌手にとって必要な発音や発声を一つ一つ提示している。こうした内容は文字化することが困難であるが、わかり易く論じている。

更に楽曲分析から各作曲家の音楽的特徴も考察し、バーバーは複雑な感情表現、コープランドは多様な音と響き、服部は詩情と感性、といったそれぞれの特徴を生かした表現方法を提案している。その提示や整理の方法は明解である。

本論文は英米歌曲の実践的な資料として大いに役立つと考えられる。

＜演奏＞

プログラム：前半はアーロン・コープランド《古いアメリカの歌I, II》全10曲、後半は服部公一歌曲集《小倉百人一首より》全６曲、サミュエル・バーバー《それでもなお 作品41》全５曲。アメリカ英語での美しい発音を目指し、かつ地域性を加味した表現はきわめて難しいと思われるがこの日の演奏は大変充実しており、申請者が目指した「ネイティブである聴衆にいかに自然に伝わるか！」そのディクションの可能性を表す歌唱であった。これは論文執筆の力が演奏の裏付けとなった成果であると言える。加えてその全てを可能に導いていた声…前回のリサイタルから飛躍的に成長が見え、のびやかで統一感のある広い音域に表現の豊かさが支えられていた。課程博士に在籍する演奏者としての研究姿勢が見事に実った瞬間である。

特に日本歌曲は作曲者本人の審査参加を得られ、工夫した演出に賛同を頂けたことはこの作品の演奏効果の発見になったことも今回の得難い成果と言えよう。

この演奏会は、「英米歌曲」がまだ一般的でない中全編英語の歌曲によるプログラムとして模範的なあり方を提示したと言える。

以上、論文・演奏共にその成果は秀逸であり、博士学位授与が相応しいと判断した。